

40564

教科書文庫

4
110
41-1912
20000 46698

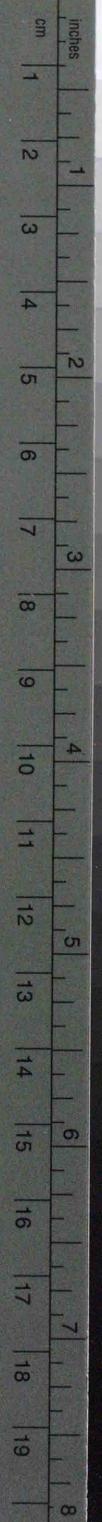
20003
02788

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

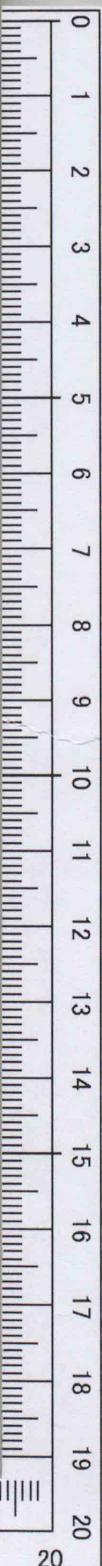
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



新編修身教科書 井上哲次郎著 一

375.9
In 15

明治四十五年二月廿九日
文部省定検査書用
中学校修身科教科書

新編 修身教科書 一
文學博士井上哲次郎著



東京金港堂書籍株式會社

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ
樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億
兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國
體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民
父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉
己レラ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ
智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ
開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義
勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ

如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民
ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ
中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ
咸其德ヲ一ニセんコトヲ庶幾フ
明治二十三年十月三十日

御名御璽

詔書

朕惟アニ方今人文曰ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼
此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ
修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコ
トヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ
共ニセムトル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日
尚淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實
業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ
華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠ノ自憊息マサルヘシ
抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ

成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪
ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今
ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ
維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚セムコトヲ
庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

内閣總理大臣侯爵桂太郎

編新修身教科書卷一

目次

第一課 修身科の目的(一).....	一
第二課 修身科の目的(二).....	五
第三課 服従は美德なり.....	九
第四課 正直は一生の寶.....	一四
第五課 何事も順序を追へ.....	一八
第六課 勉強の方法.....	二三
第七課 ナポレオンの少時.....	二九
第八課 言語・動作.....	三六
第九課 健康は幸福の基.....	四一

第十課 酒と煙草	四七
第十一課 質素を旨とするべし	五二
第十二課 勝海舟と江川坦庵	五六
第十三課 規則正しい習慣	六一
第十四課 誘惑に近づく勿れ	六五
第十五課 朋友に對する心得	七〇
第十六課 行ふ前に考へよ	七六
第十七課 我儘を慎め	八一
第十八課 反省と改過	八六
第十九課 吉田松陰	九二

新編 修身教科書 卷一

圖書之印

第一課 修身科の目的 (二)

文學博士 井上哲次郎著

修身は我等に善い事を爲よ悪い事を爲るなど教へる學科である。と云へば何でもない事の様に思はれるかも知らぬが、さて其の善と云ひ悪と云ふ事は、人々の状況によつて異なり、又同じ人でも境遇によつて差つて来るものであるから、其の差別を知り、場合に應じて、善い事を爲し、悪い事を爲しない様にす

るのは中々難かしい事である。例へば學生としては如何いふ行を爲なげればならぬか、教師に對しては如何、校友に對しては如何、學校に對しては如何と問はれたならば、隨分返答に困る事もあるであらう。其の他自分に對し、父母に對し、兄弟に對し、世間の人人に對し、國家に對し、又廣く人類に對し、如何なる事を爲なげればならぬか、如何なる事を爲てはならぬかと云ふことは、教育を受けた者でなげれば十分に解るものでない。修身科は即ち是等の事を教へる學科であつて、諸子が學校に居ては善い學生となり、成長しては品格の備はつた紳士となり、世の中へ出

ては徳望のある人となり、君に仕へて忠義を盡し、親に事へて孝行を盡す所の立派な善い人物になられる様に教へ込むのが其の目的である。

諸子の學んで居る學科は、何一つとして大切でないものは無いけれども、其の中でも修身科ほど大切なものは他にない。修身が最も大切であればこそ、かたじけなくも 天皇陛下は教育勅語を下し賜はつた次第である。それ故に、他の學科の成績が如何ほど佳いにしても、修身の成績が悪いときは、決して善い學生とは云はれないのである。

修身は總ての學科に關係があるばかりでなく、諸

子が朝起きてから夜眠るまで、一時一刻の間も、離れることの出来ないものである。即ち爲てはならぬ事、爲なればならぬ事は、時々刻々、一舉一動について生ずるもので、決して修身の時間にばかり限つた譯のものでない。然るに學生の中には、修身の時間だけ品行を正しくし、其の時間が済めば再び元の通りになる様な者がある。甚だしきに至つては、修身の時間をいやがつて、教師の講義を碌に聽かず、私に他の事を爲る様な者もある様に見える。斯様な不心得の者は、第一學生の本分に負ひて居る者で、勅語に對しても、誠に畏れ多い事と云はねばならぬ。

第二課 修身科の目的（三）

今一つ話して置かねばならぬ事は、修身は實行に關係のある學科であつて、只善惡に關する智慧をつけるばかりが其の目的でないと云ふ事である。是は善い事であるから爲なればならぬ、是は悪い事であるから爲てはならぬ、と知つて居ても、實際その通り行はなければ何の役にも立たぬ。例へば教師は尊敬すべきものであると知つて居ても、心の中で之を輕蔑し、又は蔭へまはつて悪口を言ふ様な者は、行ふべき事は知つて居るけれども、實際これを行ふ

だけの勇氣のない學生である。斯様な學生は、たゞ
ひ教科書を十分に了解し、又教師の如何なる問にも
答へることが出来たにしても、修身科の目的から言
へば、落第と云はねばならぬ。一體、知ると云ふ事と
行ふと云ふ事とは別の事である、教育のある泥棒も
あれば、無學文盲な忠臣孝子もある。即ち知識は人
を善い方にも導くけれど、又時としては悪い事を爲
るためには使はれることがある。尤も知ると云ふ事
を極廣い意味に解釋すれば、行ふと云ふ事とさう嚴
密には區別が出來ないけれども、普通に解釋するや
うに、知ると云ふ事を狭い意味に取れば、行とは別に

なる。善い事と知りながらそれを爲ない、さうして
悪い事と知りながら矢張りそれを爲る。斯う云ふ
場合が、即ちそれである。斯様な譯で、知つて惡事を
爲る者があるとすれば、却つて初めから物の道理を
知らない方が可いかも知れぬ。けれども、それは左
様でない、此の複雜な世の中に立つには、如何しても
教育がなくてはならぬ。教育を受け、物の道理を辨
へて、如何なる場合に如何に爲なければならぬかと
云ふ事は、是非心得て置かねばならぬ、左もなければ
自分は善い事を爲たつもりでも、それが道にはづれ
た悪い事である様なことが無いとも限らぬ。それ

故に諸子は、修身科に依つて是等の事を學び、而も既に善いと知つた事は、必ず之を實行する様に爲なければならぬ。修身科の目的は實に知り且つ行ふことに在るのである。諸子は將來立派な人となり、學問に於ても、品行に於ても、世の人の手本となり、且つ之を導いて行かねばならぬ責任のある人である。であるから、よく此の修身の教を守つて、日々其の行を勵まなければならぬ。修身科は最もぢみて毫も華美な所がないから、一寸面白くないやうに思はれるけれども、少し品性修養に心掛けのあるものには、何とも云へない面白味のあるものである。修身科

に對して本當にさう云ふ面白味を感じるやうな者が、一個の人格として將來發展の望みのあるものである。

勅語 學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ

第三課 服従は美德なり

服従とは、自分の尊敬すべき人の教に従ひ、其の命令を守ることをいふ。父母教師は言ふまでもなく、官吏の命を聽き、學校の規則を守り、國の法律に従ふのは皆服従である。總て自分が従はねばならぬ人

に對し、又守らねばならぬ事柄に對し、自分の我を通さず、其の命ぜらるゝまゝに爲るのが即ち服従である。

服従は一寸考へると、誠に意氣地ない事の様に思はれるかも知らぬ。學生の中には、一も二もなく教師の命を奉じ、學校の規則に従ふのを、卑屈極まる事と考へ、教師に反抗し、校則を破つて得意がる者がないとも限らぬ。併し是は大變な心得違ひで、服従の本當の意味を辨へぬ所から起る事である。何故なれば、茲に云ふ服従は、如何なる人にも、如何なる命令にも服従せよといふ意味ではない。若し私が諸子

に、馬鹿者の言ふ事をお聽きなさい、間違つた規則をお守りなさいと云つたならば、それは私が無理であらう、斯様な場合に唯命これ奉るのは、如何にも卑屈に相違ない。けれども、教師・父母・官吏などは、其の地位から言つても、其の年齢から言つても、皆諸君よりも経験に富んだ、世の中の理屈のよく解つた人である譯で、諸子が尊敬しなければならぬ人である。又法律や校則などは、或は國民の幸福を圖るため、或は學校内の平和を保つて、諸君が學を修め德に進むに便利な様に作られて居るものであるから、諸子は衷心から之を尊重しなければならぬものである。

尊敬すべき人に従ひ、尊重すべき規律を守るのが、何の意氣地なしであらうか、何の卑屈であらうか。却つて服従の出来ない者こそ、男らしくない、我儘勝手の譯の分らぬ者と云ふべきである。

世の中は、獨り學校のみに限らず、何處^よでも規律と服従とで圓^{まる}く治まつて行くものである。子^が親に従はなければ一家の内は風波絶えず、屬官^が上官に従はなければ政府の仕事は行はれず、社員^が重役に従はなければ會社の事務は抄取^はららない。殊に軍隊には嚴重な階級^があつて、下の者は順々に上の者に服従しなければならぬ。是は無理な様で決して無

理でない、斯^うしなければ、統一を保ち、風紀を維持すること^が出來ないからである。之を見ても、諸子に服従の必要なことが、明らかに分るではないか。

服従するには、快^{こころよ}く、喜んで爲なればならぬ。表

面は服従を裝^まうて、其の實いやくながら之を行ふのは、眞の服従とは云はれない。たとひ、いやでないにしても、いやな様な返事をしたり、又は愚圖^ぐくして實行しない様な事があつては、命じた人の感情を悪くするものである。『君命ジテ召ストキハ駕チ俟^ダタズレテ行ク』(論語)と云ひ、『父命ジテ呼ベバ唯シテ諾^ダセズ』(禮記)と云ふも、つまり此の意味である。尙また、

人の前でばかり服従し、退いて不平を云ふ様なことは、謂はゆる小人の爲る事で、堂々たる學生の爲すべからざる事である。行に蔭日向のあるのは、道徳に於て最も之を卑しむのである。

第四課 正直は一生の寶

言ふこと、行ふこと、總て無邪氣であつて、嘘偽なく、公明正大に、有りのまゝなのを正直といふのである。正直は修身の根本であつて、人が色々の悪い事を爲る其の初めは、皆正直でない所から起るのである。正直な人となるには、先づ第一に嘘をついてはな

らぬ。嘘は、自分の悪い事を隠すため、又は體裁て裁さを飾るため、又は自分に利益を得るために言ふものであつて、一時は誠に都合の好い様なものであるけれども、決して其の嘘が何時までも顯はれずに居る譯のものでない、早いか遅いか必ず顯はれるものである。ところで、既に彼の者は虛言者だと知れた以上は、大勢おほの前で耻をかゝられるばかりでなく、友人に對しても、教師に對しても、全く信用を失ふ様な事になる。それよりは、何事も包み隠さず、正直に有りのまゝを話すがよい。たとひ自分で悪い事とさとり、他人に知られて耻かしい様な事でも、出來た事は仕方がな

い、やはり事實の通りを言ふが宜しい、さすれば、人は却つて其の無邪氣で正直なのを愛するに相違ない。又我が身に取つても、嘘偽を包み隠す苦しさに比べて、心の中が如何なに愉快であるか知れない。

一度嘘をいへば、之を隠すために、更に第二の嘘をいひ、第三第四第五と、限りなく嘘をいふ様になる。ところで、總て悪い事は、火事の廣がる様にズン^く大きくなつて行くものであるから、初めは僅かな嘘であつても、段々にそれが增長して、遂には他の悪い事までも爲る様になる。悪人も元をたゞせば嘘をつく習慣から拗^{ねち}けて來た者が多いに相違ない。西

洋人の語に『如何なる惡事も虚言より始まらざるはなし』と云つて居る。些細の事であるからと云つて、決して嘘はつくものでない。

言葉の上ばかりでなく、日々の行についても、我等は常に正直でなければならぬ。例へば自分が悪い事を爲ておいて知らぬふりを爲たり、病氣でないのに病氣らしく見せかけて課業を休んだり、知らない事を知つて居る様な顔したりするのは、何れも不正直な行である。

つまり自分の心が正直であれば、嘘もなければ陰日向もない筈である。修身は口先きや手先きの事

ばかりでない、先づ第一に心の持ち様が肝腎であると云ふ事を、篤と了解して置かねばならぬ。

第五課 何事も順序を追へ

物には總て順序がある、此の順序を履んで、次第次第に進んで行くといふ事が、學問をするに就いても、又德器を成就するに就いても、非常に大切な事である。譬をひいて云つて見れば、丁度米を作る様なものである。米を作るには、先づ種を播き、それから、苗の成長するのを待つて、之を田に植ゑかへ、草を取り、肥料を與へ、始終水を絶やさぬやうにして、其の成熟を

待つて之を刈り取り、それから色々手數をかけて、始めて米に仕上げるのである。今一つ他の譬をひいて見れば、丁度汽車などのない地方に旅行をする様なものである。今日十里、明日十里と、段々に歩んで行くから、遂に千里の遠い處にも往く事が出来る。若しも此の順序を追ふのがまどろっこいと云つて、一日に百里も二百里も歩まうとした所で、それは到底駄目な事である。

諸子の中には無からうけれど、多くの學生の中には、學校を早く卒業したい、早く偉い人になりたいなど、始終あせつてばかり居る者があるかも知れぬ。

けれどもそれは無理な望で、徒らに頭を悩ますだけが損である。それよりも毎日の課業を順序正しく勉強して行けば、いやでも應ても及第が出来る、卒業が出来る場合によつては偉い人になる事も出来る。之に反して、いくら氣ばかりあせつても、日々の課業を眞面目に勉めなければ、富士の山を自轉車で登らうとする様なもので、轉ばずに済むものではない。西洋の諺に『徐かに急げ』と云ふことがある、學問をする者には、誠に好い諺であると思ふ。

修身科で学んだ事を實行するのも其の通りで、一時に總ての善い事を行はうとしても、それは隨分難

かしい、先づ行ひ易い事から始めて、追々難かしい事に及ぼし、小善を積んで大善を爲し、次第々々に徳に進んで行く様にしなければならぬ。『一足飛びに二宮尊徳の様な人にならうとしても、凡人には中々困難である。』 フランクリンが日々功過表を作つて、段段に自分の缺點を改め、斯様にして十三徳を養つたのは有名な話であるが、是もつまり順序を追うて次第に徳に進んで行つたのである。

今日は何事に依らず、順序を経なければならぬ世の中である。軍人にとって、一定の年限を経て、少尉から中尉・大尉・少佐・中佐・大佐と云ふ工合に昇つて行

く、會社員にしても見習から始め、経験を積んで、次第に重要な位置に進んで行く。世の中が開けるに従つて、順序といふことは益々厳しくなつて来る。變つた方法に依つて僥倖を得、捷徑を行つて早く成功しようと云ふ様な考は、既に時勢後れの考である。僥倖を當てにして居ると云ふと、はづれることが非常に多い。其の結果落膽して厭世觀を來たし、自殺するやうなこともある。實に馬鹿々々しいことである。諸子は飽く迄も順序を追ひ、正道を辿つて、確實に向上進歩を圖らなければならぬ。

物ニ本末アリ事ニ終始アリ、先後スル所ヲ知レバ

則チ道ニ近シ。(大學)

君子ノ道ハ辟ヘバ遠キニ行クニ必ズ邇キヨリス
ルガ如シ、辟ヘバ高キニ登ルニ必ズ卑キヨリスル
ガ如シ。(申庸)

第六課 勉強の方法

學問をするには、著實に、順序を履んで行かなければならぬ事は、前にも一通り話して置いたが、なほ勉強の方法に就いて、諸子に注意して貰ひたい事は、第一に、專心と云ふ事である。專心とは、譬へば猫が鼠をねらふ様に、雞が卵を温める様に、他へ氣を散らさ

ず、一生懸命になつて、専ら其の事に心を注ぐことである。いくら講義を聽いても、又書物を讀んでも、うはのそらでは仕方がない。左様な事では、鼠も逃げてしまふ、卵も腐つてしまふ。勉強家でありながら、成績の好くない學生は、多くは専心でないからであらうと思はれる。

第二に、解らぬ所は自分で研究して、それでも尙解らない時は、遠慮なく教師に質問し、又は友人に尋ねて、何處までも明かにしなければ止まないと云ふ意氣込^{こい}が必要である。不審の處を其のまゝにして、如何ほど勉強しても、眞の知識は得られないから、それ

は謂はゆる無駄の骨折損である。學生の中には、質問するのをきまり悪がつて、解らない事も解つた様な顔をして居るものがあるが、是は善くない事である。諺にも「問ふは一度の耻、問はざるは末代の耻」と云ふではないか、況して學生は修業中の身分であるから、問はざるを却つて耻とすべきである。

第三には、前と反対に猥^{あざ}に質問をする事は慎まねばならぬ。言ひ換へて見れば、自修と云ふことを務めて、成るべく自分で研究して解る様にしなければならぬ。少し考へて見れば直に解る事や、字引をひけば直に出て来る様な文字を質問するのは研究心

が足りないので、左様な勉強の仕方では、習つた事が身につくものでない。スマイルスが『外部より受くる補助は其の力薄弱なれども、内部より来る補助は其の力强大なり』と云つて居るのも、つまり自修の必要を説いて居るのである。自修は、譬へば寫眞の種板に薬をかける様なものである、薬を用ひなければ、映つた影が何時までも残らないのと同様に、自修に依らなければ、覚えた事も只腦中を通り過ぎるに過ぎないのである。昔の書生は學力があつた、今の學生は學力がないと云ふは、若し事實であるとすれば、昔は苦學自修を務め、今は成るべく勉強の勞を省か

うとする様な事に基づいて居ると思ふ。

第四に、勉強は毎日間断なく爲なればならぬ、或る時は怠り、或る時は勉強する様な仕方は、宜しくない。殊に平生は怠り勝ちで、試験前になつて、急に徹夜などして勉強するのは最も悪い。斯様な仕方は、丁度むら食ひをする様なもので、遂には心身を害するに至ること明かである。又其の成績に就いても、始終休みなく勉強して居る者に及ばない事は、譬へば競走の時に、中途から急に勢を出して、勝つことの出来ないのと同じ譯である。フランクリンが『怠惰は恰も錆の如し、使用せざる鍵は錆によりて腐蝕

し、日常使用する鍵は光輝を放つといひ、又古歌に『怠らず行かば千里の外も見ん、牛の歩みのよしおそくとも』と云つて居るのは、共に好い誠である。

學ンデ而シテ思ハザレバ則チ罔シ、思ウテ而シテ學バザレバ則チ殆シ。(論語)

博ク之ヲ學ビ、審ニ之ヲ問ヒ、慎ンデ之ヲ思ヒ、明ニ之ヲ辨ヘ、篤ク之ヲ行フ。(中庸)

人一タビ之ヲ能クスレバ、已レ之ヲ百タビス、人十タビ之ヲ能クスレバ、已レ之ヲ千タビス。(同上)

第七課 ナポレオンの少時

ナポレオン第一世は、佛蘭西の皇帝で、威勢を世界中にふるつた、大豪傑である。この人はもと地中海のコルシカ島に生れた。ナポレオンが少年であつた頃、このコルシカ島は、佛蘭西の兵に踏み荒されて、學校といつたら、實にお話にもならないいくらぬに、つまらない學校ばかりであつた。けれどもナポレオンは、一人で熱心に勉強したから、年に似合はぬ、賢い少年であつた。とりわけ、ナポレオンは、度々の合戦に、功名手柄をあらはしたパオリート云ふ人を欽慕して、自分も彼の人の様な働きがしたいと思つて居

た。で、ナポレオンの智慧才覚は、めきくと發達して、忽ちの間に偉い少年になつたのである。併しこれとても、ナポレオンの心掛がよくて、偉い人を手本にして、一生懸命に研究したからである。何一つだつて、世の中に、勉強しないで出来るものはない。

かういふ調子で、ナポレオンは、この島第一の少年となつたので、偉い少年ぢや、賢い兒ぢやと、島人たちが褒めそやした。ところが、それが總督のマルボヨフといふ人の耳に入つたので、マルボヨフは、ナポレオンをすゝめて、佛蘭西の兵學校に入學させた。

この時、佛蘭西に兵學校が十二あつたが、それへ入

學する生徒は、皆他の學校の優等生で、實に一粒選りのえら物ばかりであつた。で、兵學校へ入學するといふことは、學生に取つて、此の上もない名譽とするくらゐ、なかく、容易に這入れる學校ではなかつた。ところへ、コルシカの様な小さい孤れ島から、ナポレオンといふ少年が、學力優等、品行方正といふ、總督マルボヨフの推舉によつて、兵學校の中でも最も名高いブリエンヌといふ學校へ入學するといふので、佛蘭西國中の評判は、それはそれは大層なものであつた。ナポレオンは、この時、僅に十歳であつたといふ。

さあ、かうなると、大抵な人なら、そろく、鼻を高く

して、天狗になるのであるけれど、後に佛蘭西國の皇帝となつて、威勢を世界中にふるつたほどのナポレオンであるから、褒められゝば褒められるだけ、いよいよ油斷せず、ますゝ品行を慎んで、奮發心を起したのである。

さて、ナポレオンは、コルシカ島を船出^でして佛蘭西國におし渡り、花の都のパリーに入つたが、パリーは、世界中の都の中でも、最も立派な都で、大きな建物、美しい公園、商店の繁昌、市街の雑沓、コルシカ島に比べると、殆ど天地の差がある。

だから、はじめて此の都を見たナポレオンは、頗る

驚いたといふことである。

けれども、ナポレオンは、いつまでも驚いてばかりは居ない、ラリ^くと見歩^きながら、此の様に立派な都も、天から降つたのでもなければ、地から湧いたのでもない、つまり我等の様な人たちが、勉強に勉強をつんで造つたのだ、すれば、我等も勉強次第で、この都よりも數倍まさつた立派なものが造れるだらう、これを思へば、勉強ほど大切なものはない、と考へつていゝよく、勉強の心を堅くしたといふ。實に、こゝ^ガ、ナポレオンの偉い處である。此の時、彼^ガ此の都の繁華に浮されて、遊び事に心を奪はれたなら、ど

うしてあんな大豪傑になられようぞ。悪くすると、ブリエンヌの兵學校を落第して、はじめの大評判を失つて、つまらない者になつたかも知れない。ところが、繁華の都の有様に感じて、いよいよ勉強の心を堅くしたといふのは、實に諸子の手本となるべきところである。

かういふ心で、ナポレオンは、ブリエンヌの學校に入學した。さうすると、同じ學校に居た學生たちは、負けない様にと、初めは、ちよつと奮發心を起したけれど、あんな田舎者なら、少しも恐れることはない、と、忽ち油斷の心を起して、自分たちが身分のある家の

息子むすこであると言ふのを鼻にかけて、ナポレオンが田舎者であるのを、あざけり笑ひ、遂には、貧乏な田舎者には相手になるなと言ひふらして、一人も友だちになるものがない様になつた。

諸子、この時のナポレオンの心は、どんなであります。海山こえてはるぐと、知らぬ處に出て來たのに、同學の生徒に笑はれて、仲間はづれにされたのであるもの、さぞく情なきないことであつたらうと思はれるが、併しそこが流石なきにナポレオンで、それを少しも情なくおもはないで、話し相手のないのは、却つて勉強するに都合がよいと、彼等が嘲弄するの

を耳にもかけず、一人で一心不亂に勉強したので、程なく學問上達して、最優等で卒業することとなつた。

第八課 言語・動作

言語や動作は、學生の時代には、やかましく云ふに及ばぬと考へて居る人があるかも知らぬが、さうでない、學生は學生だけの品格を保つて、言葉づかひから、總ての動作に至るまで、野卑でない様に、又粗暴でない様に、常に注意しなければならぬ。

昔は禮儀作法を非常に重んじて、教育を受けるには、先づそれから始めたものである。ところが、今は

段々に禮儀作法が廢れて来て、學生であるか、車夫であるか、區別のつかない様な言語を用ひ、動作をする者が現はれて來た様に見える。殊に小學生には左程の者もない様であるが、却つて中等教育を受けて居る學生にそれが有る様に思はれる、これは何とかして改めなければならぬ。幸ひ諸子は、まだ入學最早の人であるから、今からして斯様な悪い風習に染まぬ様に心掛けて貰ひたいと思ふのである。

斯様に言つたからとて、何も昔の通り、面倒な禮儀作法を一々行へと言ふのではない、徹頭徹尾あそばせ言葉をつかひ、口を開く毎に頭を下げる様なこと

は爲なくとも宜しい、虚禮・虚飾を去つて、簡易・輕便を旨とする事は差支ないのである。けれども簡易・輕便と云ふ事と、暴慢・無禮と云ふ事とは區別がある。今日の學生の言語・動作は、簡易・輕便の中に自ら禮儀作法がある様でなくてはならぬ。

言語は明瞭であつて、鄭重なるを好しとする。何を言つて居るか譯が分らず、教師や學友の間に對しても、一向要領を得ない様な話し方は、言語の用を爲さないので、先方に對しても失禮である。言ふべき事は明瞭に、活潑に言ふのが、禮儀にかなつて居る譯である。けれども、活潑を誤つて粗暴に流れ、或は野

卑な言葉を使ひ、或は人を詈る様な事があつてはならぬ。どうしても明瞭の外に、鄭重と云ふ事が必要である。

動作も其の通りで、活潑なのは好いけれども、粗暴に流れては、因循と同じく、稱すべきことでない。『過ギタルハ猶及バザルガ如シ』とは是の事である。

青年時代には、野卑な言葉を使ひ、又粗暴な行をするのを、偉い者の様に思つて、一人の學生が始まると、他の學生が争つて其の眞似をする様な傾きがある。けれども、流行は必ずしも善い事と限つた譯のものでない、却つて悪い事は速に傳染して、善い事は容易

に傳らないものである。諸子は、今正に悪い事に最も感染し易い時代である。他人の爲る事が珍しいからと言つて、善惡を辨へず、直に之を眞似する様な事ではいけない。人は傳染病の恐るべき事を知つて居ながら、惡事の傳染は却つて自ら歓迎して居る者が多い、悲もべき事ではないか。

言語・動作が粗暴であれば、其の人物が卑しくなるのみならず、人に對して禮を失ひ、隨つて又往往々喧嘩の元となり、争鬭の因となるものである。『賣り言葉に買ひ言葉』といひ、暴を以て暴にかふといふ様な事は、つまり言語・動作を慎まない所から起るのである。

もの言へば脣くちびるさむし秋の風。(芭蕉)

輕舉粗暴は青年の過失にして、因循姑息は老人の通弊なり。(コルトン)

第九課 健康は幸福の基

名譽を得るのも幸福である、偉い人になるのも幸福である、財産家になるのも幸福であらう。けれども自分の身體が弱かつた時には、第一、斯様な人には事が出来ない、よしんば成る事が出来たにしても、それだけの幸福を受け樂む事が出来ない。諺にも『命あつての物种』といふが、人間萬事の基は實に健康

にあるのである。

身體の強弱は、人々の生れつきにも由るけれども、亦衛生の如何にも大に關係することである。死にさうな人が長生し、丈夫な人が夭折するのは、つまり攝生を重んじると否とに由るのである。

青年時代には、血氣に任せて色々不養生をする者が多々。其の時は幸に何の障りも無いにしても、積り積れば健康を害し、種々の病氣の原因となるものである。又大に身の健康を害すると云ふと、それが遂に一生の不幸となるやうなこともある。一體教育には智育・德育・體育とあるが、其の中では、色々の學科

は智育に當り、修身は德育に當り、體操は體育に當るのである。其の體育が近時益々重んじられて來たのも、つまり其の目的は諸子の身體を丈夫にしたいと云ふのである。之を思つたなら、諸子は決して身體を粗末にしてはならぬ、隨つて體操の時間などには、一生懸命にやらなければならぬ。體操などが何の役に立つものか、など云ふのは、つまり自分の身體が弱くなるのを喜ぶ様なものである。

さて衛生上最も肝腎なのは何かと云へば、飲食である。悪い物を飲食し、或は又善い物でも其の分量を過すと云ふ事が、一番に健康を害する原因である。

諺に病は口より入る』といふが、多くの場合に於ては其の通りである。

次に必要なのは運動である。運動は體操の主なる目的であつて、食物の消化をよくし、血液の循環をよくし、筋骨を丈夫にするには、是非これを行はなければならぬ。併し運動には往々害を伴ふことがある。餘り過激にやると、其の爲に肺病や心臓病などを起すことがあるから、餘程注意しなければならぬ。又餘り運動に熱中する爲に、課業を怠る様な者も無いてはならない。是は使に行く途中で、遊びに夢中になつて居るのでと同じ事で、大事の役目を忘れたものと

云はねばならぬ。又人と運動をなす場合に、競争に負けて喧嘩をするやうな事は、實に見苦しいものである。是も餘り感情に驅られた結果と見ねばならぬ。何によらず、物は適度と云ふことが最も肝腎である。

次には清潔である。身體・衣服・住居の不潔からして病を引惹^{アフス}することは、言ふまでもなく、自分が不潔であれば、傳染病などにうつり易いと云ふ事もある。それ故に沐浴^{ホク}・衣服の洗濯^{ヨク}・居室の掃除は、勉めて之を行はなければならぬ。

近來、冷水浴^{又は冷水拂拭}及び深呼吸の效能^が大

分知れて來た。何れも衛生の理にかなひ、健康上益あつて害の無い事であるのみならず、修養上から見ても至極結構な事であるから、諸子も之を實行せらるが可からうと思ふ。

ジュムランといふ醫師が、大病に罹つたとき、大勢の醫師が見舞に來た。其の時ジュムランは『自分はもう近い内に死ぬるのであるが、自分の病は少しも心配しない、自分の病よりも世間の人の病が氣にかかる、併し幸に三人の名醫を遣すことが出來たので、先づ安心である』と云つた。そこで人々、何れも自分の事であらうと思ひ、其の名を尋ねると、彼は『第一が

清潔先生、第二が節制博士、第三が運動國手である』と云つたので、一同顔見合せて呆然としたさうである。

飲食ノ人ハ則チ人之ヲ賤ム、其ノ小ヲ養ウテ大ヲ失フガ爲ナリ。(孟子)

健全なる精神は健全なる身體に宿る。(西洋の諺)

第十課 酒と煙草

酒は全く人間社會に不必要的ものであると云ふことは疑問であるにしても、青年が之を飲むのは宜しくない。衛生上から見ても、風儀の上から見ても、又經濟上から見ても、青年が酒を飲むのを可いと云

ふ者は誰も無い。又大人になつても飲まなくて済むものならば、それに越した事はない、何も苦しい思ひをして酒飲の稽古をするには及ばない。

酒の害は色々あるが、第一に腸・胃・脳などを悪くする事は、飲酒家も自ら認めて居る所である。獨り本人の心身を害するのみならず、其の人の子孫に禍を遺して、馬鹿や、狂人や、不具な子供などが多く生れることは、統計に由つて明かな事であると云ふ。左程までに至らずとも、酒を飲めば、自分の業務を怠り、人と喧嘩を始め、又色々の罪惡を犯す様になるのは、自然の勢である。酒を飲まなければ、人の手前を恥か

しくて、逆も出來ない事も、酒を飲むと云ふと、意識が鈍つて來て、何事でもやるやうになる。即ち道徳上の危険も多くなる。そこを能く考へて、初めに慎まねばならぬ。

酒の害については、釋迦も經文の中に説いて居られる。酒を飲めば、第一に財を失ふ。第二に病多し。第三に鬭争を好む。第四に惡名流布す。第五に恚怒俄に生ず。第六に智慧日に損す。と斯う説いてある。近來醫學上の研究が進むに従つて、酒は衛生上、百害あつて一利なし、とまで云ふ様になつて來た。さすれば、他日大に爲すあらんとする青年は、最初か

ら飲酒の習慣をつくるぬ様にするのが、最も安全な方法である。

煙草は酒ほどの害は無いと云ふけれども、其の中にはニコチンと云ふ一種の毒を含んで居るから、盛に煙草を喫む人は眩暈^{めまひ}を起し、胃を弱くし、心臓を害し、呼吸器をいためる様な事がある。これは好煙家の自白して居る所である。其の反対で、これまで煙草を喫んで居た人が之を廢めると、身體の工合^{くわい}が良くなつて、半年一年と経つ間に、次第に肥^{ふよ}つて來ると云ふ事は、是も禁煙を實行した多くの人の言つて居る事である。是を見ても、其の有害なことが分るてる事である。

はないか。殊に煙草は、酒と同じく、衛生以外に、風儀經濟などの關係もあることである。それ故に、未成年者の喫煙は、法律に於ても禁じられて居るのである。

吉田松陰先生は、極めて謹厳な、質素な人で、酒も飲まなければ煙草も喫まなかつた人である。一日門人と、煙草が無用であつて、而も害のある事を論じられた。其の時、其の場に居合せた高杉晋作は、大に先生の論に感じて、直に煙管^{きせん}を折つて棄てたといふ。男子^がが一旦悪いと覺つたら、これくらぬの勇氣^がなくてはならぬ。

第十一課 質素を旨とすべし

飲酒喫煙なども勿論奢侈であるが、此の外になほ、學生の身分として贅澤と看做すべきことが少くない。例へば上等の靴をはくとか、流行の時計を持つとか、價の高い文房具を無闇に買ふとか、珍らしい繪はがきを買ひ込むとか、三度の食事の外に飲食物に贅澤をするとか、必要もないのに旅行して金を使ふとか、色々の事がある様に思はれる。

是はつまり自分等が現に修業中で、父兄から學資を貰つて居る身分であると云ふことを考へないか

らの事である。世の中^が開けて來るに従つて、物價は段々高くなる、生活は益々困難である、其の中で、父兄^が月々諸子の爲に少からぬ學費を出されると云ふ事は、實に容易の事でない。入學の當時、又は學年の代り目などに、洋服とか、教科書とか、不時の物を請求されるとときは、普通の家に取つては、其の月の豫算にくるひを生ずるくらいのものである。然るに、父兄の苦勞を顧みずして、呑氣^{いんき}に贅澤をすると云ふは、實に學生と云ふ身分を忘れた行であるのみならず、親に對して最も不孝な者と云はねばならぬ。一體奢侈は唯其の事だけでは濟まないものであ

る。一時の贅澤は左程の事でないにしても、それが段々に增長して、習慣になつて來ると、遂には如何しても廢められない様になる。質素から贅澤に移るのは易いけれども、贅澤から質素に移るのは餘程難かしい事である。既に奢侈の習慣をつけば、次第に身を持ちくづし、高慢になり、勉強するのが嫌になる。『物ヲ玩ベバ志ヲ喪フ』(書經)と云ふは、即ちこの事である。さればかりでなく、或は父兄を欺いて金を取つたり、或は友人に金を借りたり、其の他種々の悪い事までをする様になる。それ故に、儉約を守り、質素を旨としなければならぬと云ふ事は、我が家の貧富に

關らず、總て學生たる者が、業を習ひ身を修める上からして、是非とも努めなければならぬ事である。

諺に『驕る平家は久しからず』と云ふが、平家は勢をたのんで、我儘を爲し、奢侈を極めたから、忽ちにして源氏に滅ぼされて了つたのである。奢侈は實に人の心を腐らすものである。

菜根ヲ咬ミ得バ則チ百事爲ス可シ。(汪信民)
士道ニ志シテ、惡衣惡食ヲ耻ヅル者ハ、與ニ議ルニ
足ラザル也。(論語)

第十二課 勝海舟と江川坦庵

玉も磨かなければ光が出ない、鐵も鍛へに鍛へなければ名刀とはならぬ。人も其の通りで、偉い人物にならうとするには、艱難辛苦に堪へて、平生その心身を鍛錬しなければならぬ。

勝海舟は青年の頃、西洋式の兵術を學んだが、當時好い兵書のないのに困つて居た。一日、本屋の前を通つた所が、新版の好い兵書があつたので、買ひたいと思つて、價を問へば五十兩だと云ふ。五十兩と云ふ大金には海舟も困つて、十日餘りもかゝつて漸く工面し、それから其の本屋へ行つて見ると、既に四谷

の何某が買つた後であつた。海舟は殘念に思つたが、最早仕方がない、そこで海舟は何某の宅を訪ね、何卒書物を譲つてくれと頼んだけれど、先方は如何しても應じない。それなら貸してくれと頼んだが、それも聽かない。それから色々頼んで、漸くのこと、其の人、夜分寝て居る間だけ貸して貰ふ事になつた。そこで海舟は毎夜、風雪を厭はず、一里半の道を通つて、半年の間に八巻の兵書を寫して了つた。ところが主人が驚いて言ふには、僕がまだ全部読み了らないのに、君は已に寫して了つたか、誠に耻入つた次第である、野人寶を擁するも益なし、此の書物は

君に進上しようと云つて、海舟が固く辭るを聽かず、無理やりに與へたといふ事である。

それから、是も青年の頃、海舟は剣術修業の爲に、島田虎之助と云ふ人の塾に入つた。ところが、島田先生は『今時の剣術はほんの形ばかりだ、逆もの事に足下は眞の剣術を學ばれよ』と云つて、色々と教へられた。そこで海舟は、先生の指圖に従ひ、寒中になると、書の稽古が済んだ後で、毎夜稽古着一枚で、王子の權現に行き、先づ石段に腰を掛け、暫くの間、沈思瞑目して、心膽の練磨をなし、それから木刀を振り舞はし、斯様にすること五六回、夜がしらぐと明ける頃に歸

つたさうである。初めは、夜半に唯一人、樹木の茂つた處で、寒氣に吹かれて修業するのだから、隨分氣き怯おびれもしたさうだが、慣れるに従つて、何ともなくなり、遂には却つてそれが面白くなつたと云ふ事である。

後年、海舟が江戸城引渡しの際に、立派に始末をつけ、又その前後に種々の危難に遭つて、よく之を切りぬけたと云ふのも、つまり青年の頃に心身を鍛錬した爲であらうと思ふ。

今一つ江川坦庵の話をしよう。坦庵は維新前に外交・海防・其の他色々の事について功勞のあつた人で、殊に江川流の砲術と云へば、非常に名高いもので

ある。此の人も、少い時から苦學をして、心身を鍛錬した人であるが、夏は蚊帳アカを用ひず、冬は火鉢を置かず、窓を明け放して、勉強したものである。さうして倦んでくると、剣を振つて、氣を練り、體を鍛へたといふ事である。十八の時、江戸に出て、擊劍の稽古をしたが、盛んに寒稽古をして、上手になつた。此の邊は勝海舟によく似て居る。

坦庵ミヨシカズが一廉の先生になつてから、門人に何か事を命じて、其の者が『出來ません』と云ふと、非常に機嫌ミツケが悪かつたといふ。平生、門人を諒めて、旨いものでも食はなければ味が分らぬ、何事も試みずして出來なものである』と云つたとか。

いと云ふは間違つて居る。凡そ事の成ると成らぬとは勉強と不勉強とにある、勉強すれば、下手は下手なりに成功するものである。又一藝は成し易しと人が云ふけれども、自分は馬術も、砲術も、槍劍の術も、詩文も、書畫も、和歌もやる。苦心すれば何でも出来るものである』と云つたとか。

第十三課 規則正しき習慣

『善く働き善く遊べ』といふ諺は、仕事をするにも、遊ぶにも、全力を盡して、餘念なく爲よとの教であるが、又一面から考へて見れば、何事も規則正しくせよ、遊

ぶでもなし、勉強するでもなし、のらくらして時間を費してはならぬと云ふ意味も含んで居る。

規則正しき習慣を養ふことは、勉強したり、遊んだりする時ばかりでなく、起きるにも、寝るにも、食事するにも、品物を整頓するにも、約束を実行するにも、總て必要な事である。然らば、此の習慣を養ふ事によつて、如何なる利益があるかと云ふに、

第一、時間の經濟になる。彼の事も爲し、此の事も爲し、不規則な生活をするときは、結局蛇蜂アシベとらずになつて、時間の上に大なる損失のあることは、何人も覺えのある事であらう。文明が進むに隨つて、益々

規律を重んじ殊に西洋人が規律を非常にやかましく云ふのも、つまり時間を無益に費さぬやうに、又仕事の抄取はがきやうにする爲である。

第二、健康上に益がある。勉むべき時に勉め、遊ぶべき時に遊び、食ふべき時に食ひ、起きるべき時に起き寝るべき時に寝ると云ふ生活法は、精神と身體を、適當に、規則正しく働かすのであるから、自然に元氣を生じ、活潑になり、隨つて健康上にも益ある事は、言ふまでもない。之に反して、不規則な生活をするときは、精神身體とともに、緩みを生じて、惰弱に陥り、因循に流れ、遂には種々な病氣を引起す様なことにもな

る。

第三、品行の上に關係がある。毎日、日課を定めて、規則正しい生活をするときは、終日爲すべき事に逐はれて居るから、碌でもない事を考へたり、或は爲たりする暇がない。ところが、勉強しながらも他の事を考へ、運動しながらも手を休める様な遣り方では、自然に他へ氣が散つて、善くない事をする様になる。『小人間居シテ不善ヲ爲ス』(大學)と云ふは、是の事である。

諸子は、學校に在る間は言ふに及ばず、將來、官吏になるにしても、軍人になるにしても、會社員になるに

しても、又自分で事業をするにしても、規則正しき習慣を養ふことは、諸子が將來成功を期するについて、最も大切な事である。

才氣ある人にも、不規則なれば、其の才力の四分の三を失ふ。(西國立志編)

聖人ハ尺璧セキヒツヲ貴バズシテ尺寸セキチノ陰ヒツテ貴ブ。(淮南子)

第十四課 誘惑に近づく勿れ

誘惑とは、我等を誘ひ惑はして、悪い方に引き入れるものをお云ふので、見るもの、食ふもの、著るもの、其他色々の事に就いて生ずるものである。就中、最も

弊害のあるものは、酒を飲むとか、博打を打つとか、悪い場所に入るとか、茶屋・料理屋などへ上るとか、品行上、學生に禁じられて居る事である。

諸子は、捕鼠器を知つて居るでせう。捕鼠器の中には鼠の好む食物を入れて置けば、時々捕れることがあります。併し必ずしも捕れるとは限らぬ。賢い鼠は其の危険を察して近寄らぬから、幾回かけて置いても駄目である。誘惑は丁度捕鼠器の中の食物の様なものである。之に觸るれば捕へられ、遠ざかれは何等の危険もない。ところで、運悪く捕へらるゝ鼠でも、初めから之を食ふ氣は無いのであらうが、意志

が弱くて、私慾に勝つことが出来ないから、こはぐながら近寄つて見る。近寄つて見れば、益々欲しくなるから、遂に我を忘れて、之を味ふ様になるので、學生が墮落の道行みちも、大方こんなものであらうと思はれる。さすれば、最も安全な方法は、最初から、斷乎たる決心を以て、一切誘惑に近づかない様にするより外はないのである。

學生の中には、なに一度や二度悪い遊びをしたからとて、之に溺れなければ構はないとか、或は近寄る分には差支ない、之に触れるからいけないのである、などゝ言ふ者があるかも知らぬが、それは、自分に都

合の好いやうに云ふ事である。既に一度でも試みた以上は、蟻の甘きに就くが如く、中々廢されるものでない。さうなれば、毒食へば皿までなど、云つて、自暴自棄の了見を起し、自ら好んで墮落の淵に沈む様になる。慎るべきは其の初めである。

諸子の父母は言ふに及ばず、教師も、保證人も、諸子が學科を勉強して、好い成績を得る様にと祈つて居る外に、諸子が誘惑に陥らない様に、身體に間違のない様にと、常に心配をして居るのである。殊に遠く離れて居る親たちは、心配の餘り、夜も寝られぬ様な事があるであらうと思ふ。諸君はよく是等の事情

を察して、決して誘惑に近づかない様にしなければならぬ。諸子の意志が果して強固であるか何うか、又將來成功するか何うか、それらの事は、總て此の一點によつて定まるものである。

凡そあやまりは、多くは初め一時の快きを求むるより出でゝ、後は永き憂ひ苦みとなる。初め少し心を用ひ、少し慾をこらふれば、其の力を用ふることとは少しなれど、しるしを得て、幸となることは大なり。少しの間、少しの事をこらへずして、大なる禍となること多し。(貞原益軒)

第十五回 朋友に對する心得

文中子さ『君子ハ先ツ擇ンデ後ニ交リ、小人ハ先ツ交ツテ後ニ擇ブ、故ニ君子ハ尤トスクナク、小人ハ怨ウラヨシシ』と云つて居ガ、實ニ其の通りで、朋友は、交る前に先づ擇ばなければならぬ。虛言エフマリモをなし、教師に反抗し粗暴クバウなる言動ヲなし、贅澤エヒタマリに傾き、流行ヲ追ヒ、怠惰タマリモに流れ、誘惑エフマリモに陥ルなどは、元ヲ尋ねれば、悪友の感化ヲに因ル場合が多い。それ故ニ、朋友の選擇は最も意ヲ用ひなければならぬ。如何なる者が益友で、如何なる者が悪友であるかは、諸子が少しき考へられたならば、分る事であらうと思ふが、なほ参考の爲に、貰う。

原益軒が友を選ぶについて言つた事を掲げて見よう。

『凡そ人に交るに、其の人をよく擇ぶべし。其の人の善惡見知り難くば、先づ好んで交るべからず。彼より親しむとも、只答への禮をばつとめて、我よりは疎遠かるべし。其の人小人なれば、親しみて後必ず悔メあり。既に親しくなりぬれば、小人と知れども、俄に疎じ難し、疎んずれば害アリ。……小人と知らば、我方より疎んずべし、然れば彼おのづから疎くなる。』

悪友と交れば、何時となく其の惡風に化せらるゝ、

ものである。それは丁度黴菌のやうに暗黒面を経て傳染して行くものである。それで悪友を避けて交らぬやうにするのが一番好い。之に反して、自分より優れた學友と交ると云ふと、識らず知らず其の感化を受けて、身の爲になるやうな事がある。それでさう云ふ學友は眞に益友である。朋友としては是非益友を選ばんければならぬ。

既に益友を選んだ以上は、信義を以て交らなければならぬ。信義とは互に信じあひ、誠心をつくして、偽のないのを云ふ。それ故に、朋友の間は、悪い事があれば忠告しあひ、善い事があれば共に喜び、互に深

切をつくす様にしなければならぬ。學科の如きも、分らぬ處は互に質たずねあひ、共々に進んで行くべきものである。若しも試験の成績を争ふ爲に、朋友の失敗を祈る様な事があるとすれば、それは度量の狭い人であるのみならず、第一朋友の道に背いて居るものである。

けれども、いくら朋友に深切であれと云つても、不正不義な事をしてまでも助けよと云ふ意味ではない。學生の中には、往々之を誤解して居る者があると見えて、或は試験の際に、私に朋友に教へてやつたり、或は親を欺いて、病氣などゝ稱して金を取り寄せ、

これを以て朋友を救つてやつたりする様な者がゐる。是は心得違ひである。朋友の交は飽くまで正義正道に依らなければならぬ。若し是が爲に絶交しなければならぬ様な場合が起つても、それは先方が悪いのであるから、已むを得ない事である。

併し多くの場合に於て、朋友間の不和は、餘り親密に過ぎる所から起る様に思はれる。即ち心安きに過ぎて、敬を缺き、禮を失ひ、互に言ひたい事を言ふからとの事である。いくら親友だからと云つて、人の心は其の面の如く各々異つて居るものであるから、さう自分の思ふ通りに行くものではない。そこは互

に思ひやり、少しほは氣に合はぬ事があつても、我慢して、禮を失はぬ様にしなければならぬ。即ち朋友の間には、愛の外に、敬と恕と云ふ事が必要である。是は獨り朋友に對してばかりでなく、父母に對しても、兄弟に對しても、又廣く世間の人に対する、無かるべからざる事である。

益者三友、損者三友、直正直チ友トシ、諒正直チ友トシ、多聞多聞チ友トスルハ益ナリ、便辟便辟チ友トシ、善柔善柔チ友トシ、便佞便佞チ友トスルハ損ナリ。(論語)

子貢友チ問フ、子ノ曰ク、忠告シテ善ク之レチ導ビク、不可ナレバ則チ止ム、自ラ辱辱シメラル、コト無

シ。 (同)

友情は生命に於ける最大福祉の一なり。一切所有物は、之を失ふことあるも、善良なる朋友は、尙ほ存すべきものなればなり。(ソクラテス)

智者と交る者は智者となる。(ショモン)

第十六課 行ふ前に考へよ

試験の答案を書くにも、よく考へずして、急いで書くときは、馬鹿らしい間違をすることは、諸子も経験のある事であらう。何事によらず、總て過失は、其の人の無智無能といふよりも、寧ろ思慮分別が足りない

い、即ち輕卒な所からして起る場合が多い。

火事とか、地震とか、又は人を救ふやうな急場は仕方がないけれども、さうでない以上は、何事によらず一寸行ふ前に一考することが必要である。さうして、それはさほど面倒な事でもなし、又時間を要する事でもないのに、何故又人は左様な輕卒な過失をするのであらうか。是は人々の性質にも因るけれども、又一つには無闇に事を急ぐからのことである。別して青年には、前後を顧みずして、何事でも早く爲たいと云ふ傾きがある。『せいては事を仕損する』とは是の事である。そこで、此のせき立つ心をデツト

抑へて、事を行ふ前に、是は善い事であるか悪い事であるか、爲すべき事であるか爲すべからざる事であるか、若し果して爲すべき事であるとすれば如何いふ方法で行ふがよいかなど、考ふる必要が生じて來るのである。之を思案といひ、分別わざわざと云ひ、又思慮といふ。

輕卒に事を行うた爲に、大事の戦争に敗れて、無殘な最期まつごを遂げたものは、昔から少くない。賤ヶ岳の戦に於ける佐久間盛政なども、其の一例である。此の戦は、羽柴秀吉と柴田勝家との大事な軍で、勝家の甥に當る北國第一の勇將、鬼佐久間は、秀吉方の中川

清秀を亡して、此の大合戦も最早勝家方の勝利といふ勢であつた。ところが此の鬼佐久間は、一時の勝利に慢心を起し、よくも考へずして、輕卒に進退を定め、ズウ〳〵しくも賤ヶ岳の絶頂に陣取つて居つた。これを聞いた秀吉は、寸分の猶豫なく攻め寄せて、さすがの鬼佐久間もサン〳〵に敗れてしまつた。つまり佐久間は輕卒であつた爲に敗れ、秀吉は最初から計略を立て、豫め考へて置いたから勝つたのである。

けれども、思慮分別を重んずる餘り、優柔不斷に流れではならぬ。既に思慮して、最良と決定した以上

は、猶豫なく之を行ふべきである、悠々として空しく時を過すは、事を誤る原因である。思慮と決斷とは、相待つて事を成就するものである。併し是は普通の場合である。若しも重大なる事に遭遇するやうなことがあつたならば、自分一己では決定し難いから、先生か父兄か又は其の他の先輩に質すべきは言ふ迄もない事である。

如何なる急遽の際にも、落ちついて、如何にすべきかを考ふることの必要は、諸君が現在よりも將來社會に立つ様になつてから、一層痛切に感ずるであろう。されば、今より其の習慣を養ふは、諸子が主義あ

り、定見あり、膽力あるところの立派な人物となる素地を造るものと心得て、一事一行に之を務めなければならぬ。

人遠慮ナケレバ必ズ近憂アリ。（論語）

凡ソ事ハ豫メスレバ則チ立チ、豫メセザレバ則チ廢ル、言前ニ定レバ則チ跼カズ、事前ニ定レバ則チ困マズ。（中庸）

第十七課 我儘を慎め

学生にして、友人に疎んぜられ、世の人々に惡まれ、教師や舍監に迷惑をかけ、父母に心配させるのも、實際

種々なる事から起るに相違ないが、さて其の原因を尋ねれば、多くは其の者の我儘から起ることであらうと思ふ。喧嘩口論も、元を尋ねれば、やはり我儘と我儘との衝突と看做すべき場合が多い。今茲に我儘の例を擧げて見れば、物を分けるにも、自分が一番餘計に取らうとするのは我儘である。汽車に乗つて、自分一人で廣い席を占めやうとするのも我儘である。自分勝手な遊びをして、他人の勉強を妨げるのも我儘である。總て人の氣に障るやうな事を言つたり爲たりするのも、皆我儘である。出來ない事を人に迫るのも我儘である。身分不相應な考を起

すのも亦我儘である。

世の中は自分一人でない以上は、家に居ても、學校に居ても、世間の人と交つても、到底我儘では押通されるものでない、強て我儘を押通さうとすれば、喧嘩が始まる、のけものにされる、果ては退學を命ぜられ、又警察の厄介になる様な事がないとも限らぬ。如何しても、人と交り、人と共に生活する以上は、自分の都合の好い事ばかりをする譯には行かぬ。家に居ては、父母兄弟に對しても、相當に遠慮爲ななければならぬ、これが即ち孝行ともなり、友愛ともなるのである。世間の人に對しては、同情を寄せて、迷惑を掛け

ない様にしなければならぬ、これが即ち公徳である。學友に對しては、眞に心から、人も我れも都合の好い様に圖らなければならぬ、これが即ち信義である。教師に對しては、成るべく手數を煩はさぬ様に慎まなければならぬ、これが即ち尊敬である。斯様に考へて見ると、我儘であると無いとは、殆ど道徳の全體にも關係のあるやうな事と云はねばならぬ。我儘な習慣のある者は、一寸それが氣に付かないかも分らぬけれども、人が自分に對して我儘な事をすると考へて見れば分らぬ筈はない。人の我儘な事を爲るのがどんなに嫌らしいかと云ふ事に氣付いたな

らば、自分の我儘が矢張人から見てさうなければならぬと云ふ事が分る。それで我儘を爲ないやうに自分の身を引締めるのは、即ち身を修めるのであつて、詰り自分の品位品格を高める所以である。

人によると、他人に對しては遠慮がちて、氣が弱いけれども、家庭に於ては、我儘勝手な事をして、父母兄弟を困らせる者がある。又これと反対に、家に居てはおとなしいけれど、外へ出ると傍若無人の振舞をする者がある。これは二つながら良くない事である。修身の教は、家に居ても、外へ出ても、人の見る處でも、見ない處でも、必ず一樣に守らなければならぬ

ものである。

第十八課 反省と改過

我等日々の言行に就いて、若しや悪い事は爲なかつたか如何かと、自分で自分の身をかへりみる反省といふ。徳を修める工夫にも色々あるけれど、反省は其の中でも最も效力あるものである。

人は他人の缺點には氣が付くけれども、自分の悪い事には氣が付きにくいものである。たとひ氣が付いたにしても、自分の缺點には、何とか都合の好い理窟をつけて、成るべく罪をのがれやうとするのが

一般の人情である。けれども、三百代言のやる様に、惡を善に言ひくるめ、他人を責めて自らのがれる工夫ばかり爲て居ては、到底善に進む事が出来ないのみならず、遂には、現代に多く見る所のたちの悪い人間にならなければならぬ。

人は完全な者でない以上は、誰しも過失の無いものはない。過失のあるのは、強て咎めるには及ばないが、唯過失のあつた場合に、自ら省みて、如何にも自分が悪かつたと後悔し、深く心に之を戒めて、將來同じ過を二度と爲ない様にしなければならぬ。斯様にして始めて反省は徳に進む上に大なる效力があ

るのである。孔子が『君子ハコレヲ己レニ求メ、小人ハコレヲ人ニ求ム』(論語)と云ひ、曾子が『吾レ日ニ三タビ吾ガ身ヲ省ミル』(同)と云つたのも、皆この意味に於て、反省の必要なる事を教へて居るのである。

反省によつて我が身に過失があると知つた以上は、速に之を改めなければならぬ、決して愚圖くしてはならぬ。過失があると知りながら、其の儘にして置くときは、其の過失が段々に大きくなつて、遂には如何とも爲る事が出来ない様になるであらう。過失は丁度怪我のやうなものである。一寸怪我を爲した位の事ならば、少し手當を爲ればすぐ直るけれ

ども、其の怪我に手當を爲ないばかりか、其の怪我の上に又幾度（たび）も怪我を爲居ると遂に重傷となつて、一生直らぬやうな事になるかも分らぬ。過失もやはり改めないで段々重ねて行き居ると遂に取返しの付かないやうな大過失となつて、否でも應ても悪人の仲間に這入つて仕舞ふ。それで過失があつたとすれば、すぐ改まるが一番好い。こゝが即ち善人と悪人との分れる處で、速に改むれば再び元の善人になり、改めなければ何時までも悪人として終るのである。それ故に孔子は『過チテハ則チ改ムルニ憚ルコト勿レ』(論語)と云ひ、子夏は『小人ノ過ヤ必ズ文ル』(同)

と云つて居る。過を過として速に改めることは、決して恥かしい事ではない。寧ろ男らしき行として褒むべきことである。

若しも自分の失策を他人の前に表はすのがいやだと云つて、何時までも過失を改めなかつたなら如何であらうか、罪を他人に著せる様な事はないにしても、良心が絶えず我が身を責めて、其の不愉快な事は何とも云へぬ程であらう。之に反して、過を改めた後は、入浴して垢を洗ひ落した時の様に、又不潔な衣物を脱ぎ棄て、新しい衣物に著かへた時の様に、言ふに言はれぬ愉快を感じるものである。總て道

徳を行ふに就いては、色々難かしい事もあるけれども、先づ第一に自分の良心の咎を受けない様にしなければならぬ。常に良心に満足を與へて、其の譴責を受けない様にして行けば、我等日々の行爲は、先づ間違のないものと云つてよいのである。

過は必ず氣質の偏よりおこる、剛なる人は心つき所より過おこり、柔なる人は心よわき所より過おこる、氣質の偏なる所にかちて過なからんことを求むべし。(貝原益軒)

夜ふして後、今日の我身のなせるわざをよく省みて、ひがごとあらば、後日のかゝみとして改めんこ

とを思ふべし、毎夜此くの如くすべし。（同）

第十九課 吉田松陰

吉田松陰は幕末の偉い人で、今は松陰神社と云つて、神様として祀られて居るほどである。松陰は政治上の意見が幕府と違つた爲に、僅に三十歳で幕吏の手によつて死刑に處せられたが、其の精神は忠君愛國のかたまりとも云ふべき人で、其の考と云ひ、其の活動と云ひ、實に古今に秀でたる人である。

今こゝに青年の模範として松陰の言行を少しく述べて見よう。松陰は十一歳のとき、武教座書已に殿様の前

に出て書物を講義して居る。それから十五六歳の頃には、學問も大に進み、二十歳の頃には、一廉の者學になつて居る。其の勉強家であつたことは、實に非常なもので、一例を擧げて見れば、二十一歳の時、平戸といふ處へ使に行つたことがあるが、何處でも泊めてくれないので、葉山左内といふ人に頼んで、漸くの事に或る宿屋に泊めてもらつた。其の晩は丁度雨が降つて居た。普通の人であれば、疲れては居る、雨は降るといふので、食事を了つて直に寝てしまふであらうが、松陰は葉山左内から借りて來た書物を其の夜おそらくまで寫して居たといふ事である。實に

松陰は三十年間殆ど休みなしに、たとひ牢屋の中に居ても、勉強した人である。さればこそ、其の生存の短かい間に六十部、卷數にすれば百巻以上の書物を著はして居るのである。

松陰の樂みといふは、好い書物を讀むことゝ、良い友人と交つて、有益な話をすることであつた。酒も煙草も好かなかつた事は、前にも云つた通りで、其の外、道樂といふ道樂はなく、誠に品行方正な人であつた。又今日の學生の様に、贅澤をすることは決してなかつた。松陰がたてた松下村塾では、深く奢侈を戒め、塾生は自炊をして、薪炭なども皆自分で市へ買

ひに出かけたのである。塾を増築する時にも、塾生は勿論、松陰先生までが、一緒に手傳つたと云ふ事である。質樸の風は、これを以て見ても分るではないか。

松陰は、自分より優れた人があれば、必ず其の人について学び、決して之を恥としなかつた。人の良い事は總て我が身に取つて發展の資とする、それが誰であらうと一向構はない、悉く之を自分に吸收すると云ふ大度量のあつた人である。さうして、一旦教を受けた人に對しては、何時までも其の恩を忘れず、尊敬と感謝を拂つたのである。松陰が佐久間象山

に對する態度などは、實に師弟の間に、何とも云へないやうな情愛がこもつて居る様に思はれる。

一體、松陰は自分が非常な勉強家であつた程であるから、餘り才といふものを貴んで居らぬ。才は危い、才子は過を爲し易い、やはり本當に、正直に、熱心にやリ遂げる人が偉いと云ふのが松陰の考であつて、又自分も之を實行したのである。さう云へば、松陰は因循な、不活潑な人の様に思はれるかも知らぬが、中々さうでない、非常に自信の強い人で、一旦自分の考を定めた以上は、如何なる困難があつても、必ず誠心誠意を以て終局までやり通すと云ふ氣概があつ

たのである。松陰が普通の學者と違ふのは、此の實行の點にあるので、松陰の一生涯は、學者の生涯であると共に、活動の生涯であるのである。

松下村塾の零話の中に、斯ういふ事がある。

先生門人に書を授くるに當り、忠臣孝子、身を殺し節に殉ずる等の事に至るとときは、満眼、涙を含み、聲を顫ふるはし、甚しきは熱淚點々書に滴しづくるに至る。是を以て、門人も自ら感動して流涕なみだするに至る。又逆臣君を窘あせますが如きに至れば、目眦裂け、聲大にして、怒髮逆立するものゝ如し。弟子亦自ら之を惡むの情を發す。

